

A Study of Joseph Conrad “Victory”

植木利彦, 藤原洋樹
Toshihiko UEKI Hiroki FUJIWARA

昭和50年9月16日受理

小説『勝利』(Victory 1915)を読み終えた時、我々はこの小説と『ロード・ジム』(Lord Jim 1900)の構成上の類似性を思起さずにはいられない。例えば、パトゥーサン(Patusan)とサンブラン島(Sambulan)、ブラウン紳士(Gentleman Brown)とジョーンズ(Jones)、ジュエル(Jewel)とリーナ(Lena)、ヘイスト(Heyst)とジム(Jim)、裏切り行為の繰り返し、……etc., 数え上げれば切がない。これらの小説の構成上異なっていると考えられるものはジムが強い罪悪感を抱いているのに対し、ヘイストにはそれがないこと。『ロード・ジム』の場合、善と悪(コンラッドの説く悪というのは人間に本来備わっている本能的、あるいは感情的な要素を秘めた「力」である。従って善とはそうした人間の内に宿る盲目的な闇の力を制御し得る理性的、観念的な力のことなのである)が一個の人間の内に同時的、垂直的に存在することが強調されているのであるが、『勝利』の場合は善と悪がそのような形で存在するという印象が希薄であることだろう。むしろ『勝利』は『ロード・ジム』のrealisticな一面を弱め、allegoricな面を強調しているといえるだろう。この小論では『勝利』の構成と人物対比に視点を置き、『ロード・ジム』を意識しながら、その意義を探ってみたい。

I

この小説においてもコンラッドが他の作品で用いた色々な手法が指摘されるのである。先づ第一に語り手が存在すること。小説全体はデイビッドソン(Davidson)船長の回想ということになるが、詳しく調べると第一部第一章から第三章は私達もしくは私の過去に知っていたヘイストの回想であり、第一部第四章からデイビッドソン船長と全能の語り手によって語られる。このあたりに統一性のないのはこの小説の欠点の一つと考えられるだろう。

次に時の倒置がそれである。実際の時の流れは第一部第一章から第三章、第三部第一章、第一部第四章、第二部第一章から第三章、第一部第五章、第二部第四章から第八章、第三部第二章から第十章、第四部第一章から第四章、第六章、第五章と第七章が同時に進行し、第八章から第十章、第十一章と第十二章が同時そして第十三章、第十四章となる。このような時の倒置と語り手を用いることによって、我々読者は小説の初頭においてヘイストなる人物の人となりに関接的に知らされるのであるが、次第にヘイストなる人物が小説の中

で中心的な位置を占めるに従って、彼の全貌が我々に理解されてくる。これはコンラッドが『勝利』ではピントの合っていない映像がピントが合うに従って次第に鮮明に浮かび上がってくるような手法を用いたということである(これは成功していると考えていいだろう)。

小説はパーマー (J. A. Palmer) が指摘しているように当初は realistic な世界でありながら、次第に現実世界から遊離し、舞台がサンブラン島に移ってからは allegoric な世界となっている。⁽¹⁾ ここらあたりのことを少し詳しく述べると、大海の孤島サンブラン島は世間から超脱したヘイストそのものを象徴するものであると同時に、別名、円形島 (Round Island) はヘイストとリーナーの避難場所でも楽園でもなく、来たるべきジョーンズ一味との対決のために用意された円形競技場 (colosseum) あるいは闘技場 (ring) を象徴し、彼等すべての者の墓場 (“The gigantic and funeral blackboard sign of the Tropical Belt Coal Company, still emerging from a wild growth of bushes like an inscription stuck above a grave figured by the tall heap of unsold coal at the shore end of the wharf, added to the general desolation.”)⁽²⁾ なのである。そしてこの島で善と悪の戦いが終わった後、舞台はもう一度 realistic な世界に戻ってくる。パーマーは最終章の意義を小説の現実世界への復帰の役割を持つものとして評価している。確かにパーマーの述べるような手法は「闇の奥」(‘Heart of Darkness’ 1902) においても用いられている。しかし「闇の奥」という小説はテムズ河に浮かぶ船上でマーロー (Marlow) が潮の変わるのを待っている間に彼の友人達に対して語った体験談であるからもう一度船上の描写で終わるとしても少しも不都合は感じられない。一方『勝利』はデイビッドソン船長が誰かに語っているのではなく、私あるいは私達、デイビッドソン船長そして全能の語り手が読者に対して語っているような曖昧な形をとっているので再度現実世界に小説の舞台が戻っても首尾一貫性に欠けている印象は免れない。この最終章についてカール (F.R. Carl) はコンラッドの手書き原稿をタイプしたジョン・クイン社発行のカタログにおいては、小説は最後から二番目の章で終わっていることを指摘し、コンラッドがどのような過程を経て最終章を附加えたか不明であるが、コンラッドは小説の終章ですべての決着をつけるという伝統的な手法——あらゆる登場人物の行く末を説明し、あらゆる状況を結びつけるというヴィクトリア朝小説の手法——を捨て去ることが出来なかったと指摘している。⁽³⁾ 最終章は確かに多くの批評家が問題としているように余り適切といえないところがある。彼がこの最終章を附加えた動機はいろいろ推察出来るであろうが、その一つとして次のようなことが考えられないだろうか？ すなわち、ヘイスト、リーナ、リカルド (Ricardo)、ペドロ (Pedro) が死に、ボートも流されてしまった状況の下でジョーンズ一人がサンブラン島に生残っていても彼の行く末は目にみえている。にもかかわらず、コンラッドはこの社会の反逆児をそのままにしておくことが出来ない程強い道徳的性格の持ち主であったこと、デイビッドソン船長がサンブラン島に現われた動機を読者に明確に知らせること、これらの理由によるものではなかつたらうか？

次に認められるのが反復、対立、類似及び象徴である。ジムの夢が幻想的な観念自我の実現であるならば、ヘイストの夢ははかなくうつろいやすいこの生から遊離し、生の垢に塗れることなく存在することである。彼のこのような思想は哲学者であった父親の考えであり、父親はこの世は触れるに値しない、握りしめるには余りにもうつろな世界である、従ってすべての行動は無意味であり、ひたすらあわれみの心をもって傍観することを説いた。息子ヘイストはこの父親の教えに従って根無し草のように放浪の旅を続けているのであるが、余りにもその思想が虚無的で受動的なものであるために、ジムの輝やかな夢と比較すると、当人のヘイスト自身ですらそれが自分の夢であるとは気付いていないようである。三十の半ばまで生との接触を断っている彼は、世の俗事に巻込まれることを避け、汚れることなく、まるで生まれたばかりの赤子のようにあり処世の術に疎い天使のような男である（このことはリカルドやモリソン（Morrison）によってほめかされている）。一方ジョーンズはヘイストと同じく上流階級出身の紳士でありながら、生への倦怠から彼の属する社会の慣習に従わなかったばかりにその社会から追放され放浪の旅を続けている男である。この男はひたすら生への刺激を追い求めているのであり、彼の数々の悪行は獲物を得るための行為ではなく彼の生活に刺激を与えるためのものである。すなわち悪行を楽しむための悪行であり、この点において彼は悪（Satan）そのものであるといえるだろう。この両者にはこの他にも共通し、又相反する特徴が数多くみられる。彼等は共に世間を蔑視しながらも、彼等の属していた社会の慣習を完全に捨て切れずにいる。彼等の言葉使い、外観を気にする態度、自分達を他の者達よりも優れているという意識がそれである。そしてこの二人の最大の共通点は生に対する真実味に欠けている点であろう。ヘイストの戯れを含んだ言葉使い、ジョーンズの嘲りと倦怠を感じさせる言葉使いにそれがよく現われている。次に相反する点はその体格が最も具体的なものである。ヘイストのがっちりとした男らしい体格とジョーンズの幽霊、骸骨、病身を思わせる瘦細った身体、これら体格の相違はヘイストの精神的未発達とジョーンズの精神的病を象徴しているといえるだろう。ヘイストという名前はスウェーデン語では“suppoter,” “shoulder”を意味し（リーナ、モリソンとの関係からその意味は理解される）、ジョーンズという名前は船乗りの間では「海神」あるいは「死神」（“Davy Jones is the sailor's name for death”）を意味するものである。ヘイストは思索的ではあるが、現実的な先見の明がなく闘争を好まぬ人間であり、ジョーンズは物事を深く考えず気紛れであり闘争を好む人間であるといえるだろう。

リカルドは下層階級出身の人間であり、かつてはまともな船乗りであったが、紳士ジョーンズに従って悪の道に励んでいる男である。その性格は好色にして、嘘つきであり、主人に対する誠実さを欠き、自惚れが強く、弱い者に対しては傲慢であり、自己の目的を達成するためには手段を選ばぬ非常に闘争を好む動物的性格を備えた残忍な男である。ジョーンズが観念的あるいは洗練された悪であるならば、彼はそれに仕える悪鬼（devil or subordinate evil spirit）の役割を演じているのであり、獐狂な行動的・動物的悪といえ

るだろう。その上、この男にはジョーンズとは違って彼なりの生に対する誠実さがうかがえる。このリカルドと対立する人物がリーナである。彼女もリカルドと同じ下層階級出身の人間である。彼女は旅館の亭主ションベルグ (Schomberg) の慰み者になろうとしていたところをヘイストによって救われた人物である。彼女は、ヘイストと違って思索的ではないがこれまでの苦しい生活経験から有形無形の事柄の善悪とその本質を直感的に見抜く能力を備えており、衝動的に行動する点がみられるが、彼女のそうした行動は自己保存の本能に基づくのみならず、彼女の生に対する誠実さと実行力を如実に物語っている。この彼女の生に対する誠実な態度が彼女と同じ階級に属する悪を具現しているリカルドやションベルグの誘惑に負けず、善なるもの (ヘイスト) に彼女をすがりつかせているのであり、彼女のものと呼び名、マグダレン (Magdalen = reformed prostitute = Mary Magdalene)、から天使のようなヘイストを救うことにより悪に打勝って彼女を聖女の位置にまで高め、彼女に勝利をもたらす要因となっている。

上に述べた四人がこの小説の中心人物であり、彼等は各々自己の特徴を強く打出しているのみならず、善と悪あるいは観念・理性と本能・感情といった対立を象徴するために寓話的に配列されていることはいうまでもない。

これら四人の外にションベルグ夫婦、デイビッドソン船長、ワン (Wang)、ペドロ、モリソンといった登場人物がいる。ションベルグはコンラッドが「初版本覚え書」において決して偏見によるものではなく公平無私の産物であると主張しているにもかかわらず、無知、下劣、好色、不誠実、饒舌、憶病、自惚れといった悪い面ばかりが強調されており、コンラッドのドイツ民族に対する偏見の産物といわざるをえない。しかし彼はその容貌と無知において悪の一要素——無知であり盲目的・獣的な力——を象徴しているペドロと類似しているのであり、又、彼の妻に対する傲慢な態度とリカルドのペドロに対する態度は酷似しているといえる。すなわち、彼等は相手を精神的に殺しているのである。

ワンはこの小説では非常に重要な脇役を演じている人物である。彼もヘイストと同じ根無し草的存在であったが、サンブラン島でアルフロ族の女性を娶りささやかな生活を送っている。彼はリーナとよく似たところがあり、思索的とはいえないかもしれないが、用心深く、決断力に富み、己の生命と生活を守るためにはいかなる行為も辞さない男である。サンブラン島での彼の振舞いはことごとくヘイストの生活能力のなさを強く印象づけているのである (ここにコンラッドの苦心がうかがえる)。

モリソンとデイビッドソン船長は人間の内に宿る誠実さ、優しさ、上品さ、協調性といったものを象徴しているのであり、我々に人間は信頼しうる可能性を秘めているものであるという明るさを与えてくれるのである。

次に人物から目を転じて他の類似、反復、象徴を捜してみよう。

ヘイストは深く考えることもなく、彼の信条に反するにもかかわらず、憐れみの気持からモリソンをその苦境から救ったのであるが、その結果、彼はションベルグによって事実

無根の噂をまき散らされるはめに陥り間接的にモリソンを死に追いやったという意識を抱いているのであるが、思索的な人間には似合わぬこのような衝動的ともいえるヘイストの行為はリーナをジョンベルグの旅館から連出すきっかけともなった行為にもみられるのである。従ってモリソンとヘイストとの事件は『勝利』においてヘイストが同様な行為に出る可能性のあることを暗示するものであり、この点は『ロード・ジム』と全く同じパターンであるといえる。それ故リーナの側から見れば、彼女も又ヘイストの気紛れによって救われたのであり、モリソンと同じ運命にあるのではないかと一抹の不安を覚えるのは無理からぬことである。

更にリーナがヘイストとの関係において彼の行動力、決断力の欠如を補っている関係は動かぬ気紛なジョーンズの手足となって行動するリカルドの関係と類似しているものであり、精神的に非常に過激であったヘイストの父親の仕事に対する冷徹な思想は雇用者と非雇用者との関係に対するリカルドの侮蔑的な意見と本質的には同質のものである。又、ヘイスト、リカルドそしてワンはリーナの行為に欺むかれ、ジョーンズはリカルドに欺むかれ、ジョンベルグは彼の妻とデイビッドソン船長に欺むかれている。サンブラン島にたどり着いたボートの中で二つ折りになっているジョーンズの姿と海底に沈み二本の杭の間にえびなりになっているジョーンズの姿。野蛮人ペドロの兄の死に方とペドロ自身の死に方。帆船の一等航海士であったリカルドが船長を裏切った行為と彼がジョーンズを裏切ろうと考えた気持。リーナの部屋のカーテンとジョンベルグ夫人のショール（この二つの品物は彼女達の連合い——ヘイストとジョンベルグ——が彼女達を真に理解しえない象徴として用いられている）。最後に孤島サンブラン島に俗世界からの善なる使者リーナを受入れたことはヘイストが彼自身の中に俗世間を受入れたことを意味するのであり、その結果、当然のことではあるがリーナとは異なった俗世間からの悪の使者（“‘I, my dear sir? In one way I am—yes, I am the world itself, come to pay you a visit. In another sense I am an outcast—almost an outlaw’”）をも受入れなくてはならない運命にあることには特に注意しなくてはならない。

II

前章で記述した様々な要因が有機的に関連して『勝利』の舞台は展開していくのであるが、主人公ヘイストは、ジムが観念自我を実現するための勇敢な行動に出ることが出来なかったことに幻滅したのとは違って、生とも時間とも無縁であり、ただ傍観しているのみであるという彼の信条とは逆に行動に出たことに幻滅を感じ、理性と感情の不一致に悩んでいるのである。しかし我々がヘイストという人物を洞察すると、彼のこの信条はじつにあやふやなものであることに気づく。彼のこの信条は彼が二十才前後の時に父親と共に生活した三年の間に培われたものである。彼は父親から虚無的な思想を教わりそれを自らの信条としているのであって、彼の実際的な生活経験から培われたものではない。従って父

親ほどの苦い経験も辛苦も味わっていない彼に父親の哲学を理解出来るわけがなく（理解出来たとしてもそれは表面的、観念的にすぎないだろう）、彼の虚無的な生き方は若かりし頃の彼の偉大な父親に対する一種の憧れであり、彼のポーズにすぎないと思われる。この点をリーナは鋭く見抜いている（“‘You are putting it on.’”）のであるが、このような実社会と縁を切り、影のように風のように生きるという生き方は実社会の中ではその構成要員として相応しからぬ生き方なのである。従って彼の生き方は非現実的、非日常的といえる。だが非社会的な思想の鎧をまとっているヘイストの真の人間性が非社会的でないことはモリソン、リーナを救った行動からも明白であるが、熱帯石炭会社の監督となって全力を傾けて働いたことがなによりもそのことを如実に物語っているのである。換言すれば、彼は行動的、社会的人間となりうる要素を多分に秘めていたといえるのであり、そのことはリーナとの関係が深まるにつれてヘイストが彼の否定的な考えが次第に彼から離れつつあることを意識している点や、孤独感を味わっている様子にうかがえるのである。唯、彼の場合も、ジムが余りにも強い観念自我に捕われて観念自我と現実自我との差異に気づかず観念自我を誤信したように、長い年月にわたって信じてきた虚無的な観念が彼の本質自我を押し殺し彼の一部となり始めているのである。この観念が行動に出ようとする彼の本能と意志に対する拘束力を発揮し彼を優柔不断な人間にしているといえる。この様な彼の態度がいわゆる「南海のハムレット」といわれる所以でもある。リーナはこうした彼の性格に気づき、彼を窮地から救えるのは彼の行動力ではなく彼女の行動力であり、無垢な彼には悪を相手にすることはとても出来ないことであることを知っている。従ってリーナの勇敢な行為は単なるヘイストの生命を救う行為というだけではなく、この悪も善も存在する現実の社会において、実際の情況に即した行為と互いの協力が難局を切り抜け自己を守り得るものであることをヘイストに認識させる行為であり、彼女の死はヘイストと彼の否定的な思想、あるいは父親との絆の断絶をもたらし、ヘイストに多面な様相を秘めた複雑な社会にあって彼の父親のような生の一断面のみを捕えている思想だけを信じて生きることが如何に近視眼的なものの見方であり、誤った生き方であるかを教え、たとえ彼の父親の説くごとく虚しいつかみどころのない生であっても、その生にとるにたらない人間が協力しあって積極的に働きかけるところに生の喜びと意義を見出す道が開けるのであって、欠点だらけの人間が一人世間と妥協もせず生きることが如何に不自然であるかを明らかにしたといえるだろう。欠点だらけの弱い人間が協力しあい、社会の構成要員となって生きていかななくてはならないことを物語るのは『勝利』においてリーナ一人だけではない。それはあのサンブラン島での激しい嵐に生残ったワンである。世間を捨てたヘイストには、**『あ**の嵐の中であって自らが捨てた世間に逃亡することも援助を求めることも許されませんが、ワンはアルフロ族の女を娶ったことによって嵐を避けるために岩の向う側の社会に彼の身を隠す権利を得ているのである。更に又、ジョンベルグがリーナに熱をあげ、家庭も仕事も投出してリーナとの新しい生活を切望する時、彼の社会道徳に反する行為を未然に防い

だのは他でもない、あらゆる人々から「愚か者」、「木偶の坊」と思われている彼の妻である。彼女がリーナとヘイストの駆落ちを助け、デイビッドソン船長にジョーンズ一味がサンプラン島に向ったことを教えた動機が妻の座を守るという単純かつ切実なものであっても、それがションベルグ夫婦の危機を救ったのである。すなわち、ワンもションベルグも彼等の伴侶の力によって彼等自身の身を守りえたことは、「結婚し家庭を築くとは如何なるものであるか」という議論はどうであれ、家庭とは我々の生きている社会を構成している最小単位の共同体であるといえるだろう。そしてその最小単位の共同体を形成するにも互いの妥協と協力を必要とするのであり、彼等二人にはその社会に対する協調性が備わっていたということになる。従ってヘイストやジョーンズのように社会組織の最小単位である家庭も築かず一個人としての気儘な不自然な生き方そのものがそうした人間の破壊的要素となりうることを証明しているといえる。個人主義者であり、世間との連帯感を欠き、一人「伽の国」に生きるヘイストや女嫌いの反逆児ジョーンズはこの点に気づいていない。それゆえ、社会を彼等の望むように変えることを、あるいは社会から断絶することを願う彼等は当然社会から拒否され、あるいは遊離し社会の構成要員となりうる資格を欠いているのであり、滅びるように運命づけられていたといえるだろう。

III

『勝利』を構成面からみるならば、一部の批評家によって非難されているような使古された表現、登場人物（特にリカルドとリーナ）に相応しからぬ言葉使い、語り手の不統一といった欠点があることは否定出来ない。しかし反面、コンラッドはこの作品に全力を注ぎ、多くの象徴、アイロニー、反復、類似……ect., を使用し、作品を非常におもしろく且つ意義深いものにした技巧は高く評価しなくてはならない。特に『勝利』の世界は『ノストローモ』の世界のようにあまりにも煩雑であり広大すぎて読者を当惑させるという欠点を解消し、うまくまとめられている。これはコンラッドが『勝利』の世界が包含するすべての問題をサンプラン島に集中させ、realistic な面と allegoric な面を重複させ関連づけながら最後までこの二面性を混同しなかったことと、量的に非常に長い物語を多くの章に分割することによって時間的な流れを明確にした点にあるといえるだろう。従って全体的に見るならば、無知、怠情、秘密、虚栄といった人間の愚劣さによってかろうじて均衡を保っている『密偵』の構成には及ばないが「秘密の分身」に近い構成をもった作品といえるだろう。

コンラッドはある問題を視点を替えて描くことはよく知られているが、『勝利』も例外ではない。ヘイストとジムを比較してみる時、すでに述べたように非常に共通した点が多い。すなわちコンラッドは観念自我と現実自我の相違、理性と感情の不一致という問題を異なった二方面から追求したといえるだろう。

ジムは行動に出れない現実自我を認識しようとせずに幻想的観念自我に固執し、最終的

には彼の生命を賭して観念自我の実現を果たしたのであったが、ドラミン (Doramin) の銃弾に倒れるジムの微笑は九分九厘自嘲的な微笑であったろう。ヘイストも息詰る戦いの後、リーナによって我々は現実の社会と接触をもたずには生きてはいけないことを、そして現実を直視しそれに対処して行ってこそこの世において生きられることを教わった時、彼は自分の信念に従って無垢のまま生きていくことが不可能であり、汚らわしい社会の中で生きるには自分が余りにも無力であり、我慢が出来ないことを知りその生命を断ったのである。ここで我々は二人の生き方に一つの共通点を見出すのである。それは彼等がこの生を体全体で生きているのではなく頭で生きているということである。彼等は観念的、非日常的な生を生きているのであって、現実的、日常的な生を生きているのではない。彼等には人間存在の不可欠な要素である感情や本能が誰の内にも宿っているものであり、理性はそうした本能や感情に追従するものであるという事実の認識を欠いているのである。観念的、非日常的な彼等がこのような事実に気づくために払ったその代償の大きさを思いおこす時、我々はコンラッドの次の言葉を思い出さずにはおれないのである。

Thinking is the great enemy of perfection. The habit of profound reflection, I am compelled to say, is the most pernicious of all the habits formed by the civilized man.⁴⁾

BIBLIOGRAPHY

BOOKS

- Conrad, J. *Victory*. London: J.M. Dent and Sons Ltd., 1967.
 Palmer, J.A. *Joseph Conrad's fiction*. New York: Cornell University Press, 1968.
 F.R. カール著 野口啓祐・野口勝子共訳 『ジョゼフ・コンラッド』北星堂, 1974.
 Guerard, A.J. *Conrad the novelist*. Cambridge; Massachusetts: Harvard University Press, 1965.
 Stewart, J.I.M. *Joseph Conrad*. London: Longmans, 1968.
 Walpole, Hugh, *Joseph Conrad*. New York: Haskell House Publishers Ltd., 1963.
 Bradbrook, M.C. *Joseph Conrad: Poland's English Genius*. New York: Russell and Russell, 1966.
 Cooper, Christopher, *Conrad the Human Dilemma*. London: Chatto and Windus, 1970.
 Hewitt, Douglas, *Conrad: A Reassessment*. London: Bowes and Bowes, 1970.

NOTES

- 1) J.A. Palmer, *Joseph Conrad's fiction*. pp. 166-197. 参照
- 2) J. Conrad, *Victory*. p. 42.
- 3) F.R. カール 著, 野口啓祐・野口勝子 共訳 『ジョゼフ・コンラッド』, pp. 317-346. 参照。
- 4) J. Conrad, *Victory*. pp. x-xi.

この小論は植木利彦(岡山理科大学)・藤原洋樹(岡山理科大学非常勤講師)両者がコンラッドの『勝利』について討論した結果をまとめたものである。

Summary

In case of discussing Conrad's *Victory*, we must take into consideration both its composition and content.

In this thesis we are going to clarify the realistic and allegoric aspects of *Victory*, paying reagrd chiefly to its composition.